

2014年7月20日

ブライアン・ブルエット牧師

## ピリピ人への手紙：喜びの青写真 #5

今日みことばの学びに入る前に、少し柄でもないことをしてみたいと思います。今日ともに学ぶ聖書箇所は、シェイクスピアを勉強した高校時代へと私を引き戻します。この聖書箇所を読むと、ハムレットの名ぜりふをいつも思い出します。ハムレットもまた、人生や選択について思い悩んでいました。そしてこう言います。「生きるべきか死ぬべきか。」

皆さん、今のあなたの人生を表す言葉を3つ週報に書き出してみてください。今朝のメッセージの中で、その3つの言葉について改めてお聞きします。私たちは、パウロがピリピの教会に宛てて書いた手紙の学びを続けています。これまでの箇所には、ピリピでの良い思い出に対するパウロの喜びが綴られていました。パウロは第二次宣教旅行中の紀元62年ごろにこの教会を開拓しました。パウロの近況と福音宣教が前進しているかを教会の信徒たちが尋ね、パウロはそのふたつの問いに答えました。パウロは幸せと喜びの違いを承知していました。幸せは一時のものですが、喜びは一生続くものです。というのも、喜びの根底にはイエスとのつながりがあるからです。1章のテーマは苦難の中にある喜びでした。パウロの場合、状況が最も悪いときにこそ喜びが増すようです。そのような状況では、イエスとのつながりとキリストを信じる信仰のみに頼るからです。今日は、死に直面しても喜びを持っていたパウロの姿を見ていきます。今日の聖書箇所はピリピ 1:18-21 です。

### ピリピ 1:18-21

1:18 すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいきます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。1:19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。1:20 それは私の切なる祈りと願いにかなっていません。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。1:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。

パウロは、ハムレットと同じことを問いかけているようです。生きるにも死ぬにもとあるとおりです。パウロは、死にも動じない境地に到達しました。悩みや苦労にも動揺しません。パウロは、「自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」とおっしゃったキリストの言葉を体現しました。

マタイ 16:24 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

人に何と思われようと、自分の命がどうなろうとかまわないとパウロは言います。信仰によって徹底的に献身した姿です。この世は、物質主義で自分を何より優先させる世の中です。今日、人々はあらゆるものを求めます。パウロのようにひとつのことに焦点を絞りません。今日は、パウロがキリストだけに焦点を絞れた理由を3つご紹介したいと思います。そうすれば、パウロがなぜこの箇所を記したのかもわかるでしょう。

### #1 パウロは神のみことばを信頼している。

ピリピ 1:19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。

この個所の「知る」と訳されたギリシャ語は「オイダ」です。パウロは、自分の運命をよくわかっていると言います。自分の身に起こっているすべてのことを受け入れ、喜びを持つことができるのは、その結末を知っているからだというわけです。パウロは、「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」というローマ 8:28 のみことばも記した人です。この 19 節の言葉は、ヨブが試練の中で語った言葉に通じます。

ヨブ 13:16 (口語訳) これこそわたしの救となる。神を信じない者は、神の前に出ることができないからだ。

救いという言葉有二通りに解釈することができます。まず、ヨブの場合のようにすぐにやってくる救いを指す場合もあれば、パウロの場合のように死ぬまでを長い目で見た救いを指す場合もあります。どちらにせよ、私たちは救いを喜べます。

### #2 パウロは聖徒たちの祈りを信頼していた。

ピリピ 1:19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。

私たちクリスチャンは、神がご自身の民の祈りをとおしてみこころをなされるという事実を忘れがちです。ピリピの信徒たちが祈ってくれていることで、パウロは心強かったことでしょう。「私たちがついてるよ」と応援されているようです。彼らはいつもパウロの味方でした。それがよくわかる聖書個所をふたつ挙げましょう。ローマ 15:30 とヤコブ 5:16 です。

ローマ 15:30 兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。

ヤコブ 5:16 ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。

私自身、皆さんの多くが私たち夫婦のために祈ってくださっていることを喜んでいますが、長年の経験から、私たちの人生に和をもたらしてくれるものを3つ見つけました。私たちの足を照らしてくれる神のみことば、神とのコミュニケーションである祈り、そして、私たちに慰めや導きを与えてくれる内住の聖霊です。

### #3 パウロは聖霊の助けを信頼していた。

ピリピ 1:19-20

1:19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。

1:20 それは私の切なる祈りと願いにかなっていません。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。

御霊の助け、なんとすばらしい言葉でしょう。ここでは、聖霊によって与えられた助けという意味です。聖霊自身が与えられたことを指しているわけではありません。ヨハネ 14 章には、

聖霊が私たちの助け主となってくださることが書かれています。聖霊が今日の私たちに与えてくださる助けとは、私たちのとりなし手となってくださることです。私たちが祈るすべての祈りは、しっかりと神に届いています。聖霊は私たちを慰め、導き、良心の門番の役割を果たして私たちの決断や選択を助けてくださいます。聖霊が与えてくださった助けをパウロが信頼していると記されていてよかったです。パウロは、キリストに従う人の非常に良いお手本です。皆さん、自分に問いかけてみてください。あなたは、イエスに従う人のお手本とされていますか。

## 結び

冒頭で、皆さんの人生を表す3つの言葉を書き出してくださいとお願いしました。どんな言葉だったにせよ、パウロと同じ視点を持ちたいものです。つまり、人生は自分のために生きるものではないということです。パウロが語るように、私たちの命が神とひとつになることです。主役は、あなたでも私でもなく、神なのです。

### ピリピ 1:21

**1:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。**

パウロはこの一節の言葉にすべてを集約します。この一文は、一章のクライマックスと言えます。「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」生きることはキリストだと言い、キリストは彼のすべてであり、その人生はキリストに尽きることを一言で表しました。パウロはイエスで満たされていました。彼の人生はキリストに捧げきった人生です。パウロの言葉をもう少し身近なものとして捉えれば、わかりやすいかもしれません。次のように言い換えてみてはどうでしょうか。私にとって、生きることが富であるなら、死ぬことは喪失です。生きることが名声なら、死ぬことは喪失です。生きることが財産なら、死ぬことは喪失です。生きることが力と権力を自分のものとするなら、死ぬことは喪失です。一方、生きることがキリストなら、そうやって初めて、死ぬことが益となるのです。私たちもパウロの言葉に共鳴し、同じように言うことができるでしょうか。